

幼児の音楽教育導入期に関する一考察

森 脇 由 紀

四條畷学園短期大学

A Study on the Introduction Period of Music Education for Infants

Yuki Moriwaki

Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要 第 50 号 別刷

平成 29 年 12 月 25 日

幼児の音楽教育導入期に関する一考察

森 脇 由 紀*

A Study on the Introduction Period of Music Education for Infants

Yuki Moriwaki

はじめに

「音楽は音の芸術ですから、聴覚芸術です」「音楽教育は聴覚を通して音楽美をより深く感じる心を育てる教育」脚注1)「耳は音の大統率者である。それを悟ることが全音楽研究の基礎となっているのである。」脚注2)

「聴く」という感覚は音楽の根本を成している。しかし、音楽の教育現場に於いて、生徒、学生たちは音楽に接しながらも「聴く」ということにどれだけ意識をおいているだろうか。

これは私が日々、2、3歳児から初歩学生まで、様々な年齢層、音楽経験の生徒と接して感じることである。次々と入ってくる視覚情報に意識の大半を費やし、聴覚を意識の片隅に追いやり視覚に頼った感覚に基づいて音楽に接していないだろうか？導入期を中心に幼児の発達段階を順に追いつきながら、それぞれの段階でのレッスンの内容、方向性を確認し、視覚、聴覚の意識下の優位性の問題点と注意点、そして、幼児と初歩学生の共通点という観点からも論じたい。

音楽の三要素である、リズム、メロディ（旋律）、ハーモニー（和音）、を身につけていく過程を三種のレッスン形態から考えたい。ピアノ実技、音楽の総合的な基礎教育であるソルフェージュ、身体の動きを使ったリトミックの三種類である。

1. ピアノ実技

語彙の著しい増加がみられ、歩く、走る、ジャンプするなど身体能力の高まる2歳ごろは、レッ

スンの形を取る音楽教育を始める好機である。スイスの心理学者ピアジェ（1896 - 1980）によると、「2歳から7、8歳は前操作期：頭の中でイメージやことばをつかって、思考できるようになる時期。」脚注3)である。

初めてのピアノのレッスンで、電子ピアノやアップライトピアノにしか接したことのなかった子どもがグランドピアノを目にした時、内部で整列した小さな部品が鍵盤の動きに応じてせわしく上下するのを見つけて、吸い寄せられるように何度も鍵盤を押し、高音、中音から低音までその動きに見入る、という光景がよく見受けられる。ピアノを弾くということは鍵盤を押し下げる動きであるのに、実はハンマーが跳ね上がり弦をはじいて音が鳴っているのだということを発見する瞬間であり、この時ピアノ内部の動き〈視覚〉とそれに対応して鳴る音〈聴覚〉への意識が存在する。この感覚を持ち続けて欲しいと願う光景である。

このような反応は、電子ピアノしか弾いたことがなかった初歩学生においても共通しており、ピアノの鍵盤を押した時、指先に感じられる抵抗感、重みとして、また弾きにくさとして感じられる。その場合にも、ピアノの内部や弦の動きの知識は有意義であり、じっくり内部を見せ説明することでその後の指の動きやタッチのレッスンにもつなげていくことが出来るだろう。

レッスンでは、鍵盤上の1点ハ音（ド）を見付けることから始める。1点ハ音—鍵盤上のほぼ中央に位置するこの音を中心に、右手ドレミファソ、左手ドシラソファという移動のない5音を使用し、5指の独立した指の動きの定着を図る。

ピアノの鍵盤の並びは規則性がある。黒鍵が2

* 四條畷学園短期大学 非常勤講師

つ、3つ、2つとなっており、2つ並んでいる左側がドの鍵盤である。黒鍵の並びの違い、2と3の違いを見つけられるのは、おおよそ3歳である。「3歳時であっても3以下の小さい数では保存が成立する」ことが分かっている。脚注4) 黒鍵2つはチョコの2本指との数の一致で説明することが出来、それを理解することが第一歩となる。「チョコでピアノが弾けるよ」の魔法の言葉でレッスンは始まるのである。さらにチョコを演出するためにジャンケンでチョコを登場させる。ジャンケンの理解も、3歳0ヶ月。(田中、1989) 脚注5) チョコの手の動きを意識させるため、手あそび「ゲーチョコパーで何つくろう」(フランス曲) 対象年齢3歳～、「ゆびのうた」などは最適である。

ピアノの鍵盤の白と黒という〈視覚〉情報を判断し、鍵盤に触れるという〈触覚〉が加わる。1点ハ音(ド)を親指(第1指)で押す〈触覚〉、ドの音高で歌い、同じ音高かどうかを聴く〈聴覚〉、5線楽譜の音符の位置を確認する〈視覚〉。視覚情報のみに意識を奪われずバランスよく「視覚、聴覚、触覚―諸感覚の統合」脚注24) がなされるように、指導が必要である。

アメリカ合衆国の発達心理学者エリクソン(1902-1994)の「ライフサイクル論」によると、「3～6歳で形成されるものは『自発性』」である。自分で音符が読めた、ピアノが弾けた、という達成感は、3歳からの時期、知的興味や関心が高まり、自発性の形成とともに大きな前進の可能性を秘めている。一方認知心理学では、ピアノの技術の習得は「自転車に乗る、泳ぐ、編み物をするといった『手続き記憶』に分類される。『手続き記憶』は長期に渡って保持される。しかし、獲得するためにも、普通、かなり長期にわたる練習が必要になる。」「懸命の努力の末に獲得される技能である」そして、「手続き記憶は言語化が非常に難しい。」脚注6) ピアノを弾くことは、指先の動きという体性感覚である動きの技能を、手続きとして認知することなのである。

「懸命の努力」のため、少しでも分かりやすく様々な練習方法を考えるが、以下はその一例である。両手奏の曲の練習のために、まず①片手奏での練習が必要である。②次に低音部を奏し、高音部(メロディであることが多い)を階名唱する。楽譜上の縦のラインを意識する練習であり、楽譜を読む

〈視覚〉、歌いながら声の音高を聴く〈聴覚〉、鍵盤の位置を確認し指を動かす〈体性感覚〉が統合されるまで繰り返し行うことにより、両手奏への準備練習となる。③ゆっくり、一定のテンポで弾く。④その曲本来のテンポに上げていく。

この練習方法は、幼児だけでなく初歩の学生にも非常に有効である。視覚優位になりやすい学生には鳴っている音を聴くように言葉掛けし、聴覚優位の学生には聴き覚えで弾いてしまわないために、線と間の記譜の法則など視覚的な楽典知識を意識して織り交ぜていく必要がある。ゆっくりのテンポ設定にし、確実に拍子を取りながら楽譜を確認しつつ、音高を聴き取る時間を確保し、視覚と聴覚情報をバランスよく取り込めるまで練習する。統合されたのち、その曲本来のテンポへと徐々に上げていくという、根気の要る作業である。

2. ソルフエージュ

音楽の総合的な基礎教育であるソルフエージュのレッスンでは、音感を育てていくために意識的に聴覚に働きかけていく。2, 3歳児のレッスンでは「音当てあそび」として、目をつぶって音に耳を傾けさせる。純粋に「音を聴く」ことに集中できる時間である。

2, 3音のメロディをピアノで弾き歌い、真似させる「節真似」など、色々な導入方法があり、単音を常に和音感と結び付けてイメージしながら聴くことで、三要素のメロディ感と和音感を一体的に感じ聴き取る聴力を身につけていくことが可能となる。

長3和音と短3和音の聴き比べは3歳の幼児でも比較的容易であるが、転回形を含め、主要3和音と副3和音、その比較として増3和音、減3和音の音名を正確に聴き分けるには相当の集中力を要する。各和音の音色を色で言い表してみるなど、音にイメージを持つことで聴き取りやすくなる。

このような音感にリズムが与えられた時、メロディという形を成す。メロディ唱のレッスンには視覚情報として楽譜が必要であり聴覚を十分に意識しつつ視覚情報通りの音高を歌唱する訓練である。またメロディ唱をする時、まずリズムのみに着目してリズム打ちをし、拍の感覚と一体的に感じ取らせる。その後音とリズムと共にメロディ

として歌唱することで、きっちりとしたリズム感、音感を伴ったメロディ感が培われる。

この一連のメロディ感への作業の間、当然、聴覚を意識しつつける。しかし視線は常に目の前の楽譜に注がれ、聴覚より視覚に意識を奪われていないだろうか？常に聴覚へ、聴くことへ意識を向けなおす働きかけを怠らず、視覚情報を自分の意識の中でバランスよく意識できるように時間をかけていく作業が必要である。2, 3歳の幼児のうちは「聴く」と「音符を読む」作業は分離し、視覚に捕らわれず聴覚教育、読譜教育を平行するのがよい。「聴く力は、視る力と比べれば、初期の段階から発達しやすい。というのは、『視る』ためにはまなざしを意志をもって向けなければならないのに対して、『聴く』は耳を閉じることができないがゆえに受身的に入力される。」「音・音楽は情動に働きかけやすい点でも、初期段階の子どもにとって視覚刺激よりもはるかにうけとめやすい。」脚注7)

バランスよく意識できるようになるまでには個人差があるが小学校中学年以上になるまで待たねばならないことが多い。

簡単な聴音のテストをした。

生徒、学生が楽譜を目で追いながらピアノを弾いている状態の場合、例えば一つ音を間違えることで本来明るい音であるはずの所で、暗い音になってしまうと気づかずそのまま次の音を弾き続けるということがある。明るいはずの音が暗くなり、時には不協和音になっている場合もある。長、短の聴音感覚の認識があるのかを確認したい。

音名を答えるようにすると読譜能力の影響を受けるため、長、短の音感のみを答えることとした。

- ・対象：普段譜読みを苦手とする生徒5人、学生5人。
- ・方法：ハ長調、イ短調、ト長調、ホ短調、ヘ長調、ニ短調から、基本形、転回形を含む長3和音、短3和音10個を聴かせる。長和音：明るい 短和音：暗い と口頭で答える。
- ・条件：4分音符＝60（1分間の拍数）の速さで1拍聴かせ、一音ずつ口頭で長和音か短和音か答える。

ピアノ経験			結果
開始年齢（歳）	継続年数（年）	性別	正答率（％）
5	7	女性	100
4	8	女性	100
6	3	女性	90
6	6	男性	100
3	10	女性	100
18	1.5	女性	80
18	1.5	女性	100
16	4.5	女性	90
5～8、18～20	3、1.5	女性	100
4～9、16～20	5、4	女性	90

結果は、読譜に苦手意識がある生徒、学生の年齢にかかわらず長和音に対して全問正解、短和音に対して一部不正解となった。長和音の直後の短和音は即答であったが、短和音が連続すると時間がかかる、又は誤答である傾向があった。生徒と学生に大きな隔たりはなかった。明るい、暗いという2種類の言葉に限ったことで表現しやすかったとも思われる。事前に言葉を指定せずに和音を聴かせると、元気、楽しい、悲しい、落ち込んでいなど、変化に富んだ言葉で表現が様々であった。聴覚に限定し聴音すると、生徒たちはこのように音に敏感で感性豊かに音を感じ取っているのだということを知る機会となった。

音楽の三要素の一つ「リズム」とは「拍子に乗って流れる音の長短、強弱、さらに音のない時間などが組み合わせられてできる独自の音型〔figure 英仏〕をいう。このリズムの音型は、音符や休符の配列状態によりごく自然に音楽的な accent がつきそれ自体が最小限の秩序を保っている。それをさらにまとめ、音楽的でメリハリのある rhythm にしてくれるのが拍子である。」脚注8)

別宮が「拍子という物差しを基準に旋律をきく。」「拍子にもとづいたリズム感」脚注9)と述べている通り、拍子とリズムを切り離して説明することは出来ない。

レッスンではリズムを感じるために、手を打つ、ひざを打つ、足を踏むなど体の動きを伴って体験させる。4分の4拍子の場合、4分音符（タン）は1拍となり、まずは1分間に60の速さで、拍子打ちをし、リズムを感じる。打つのは手拍子、小太鼓など打楽器でもよい。8分音符（タタ）は4

分音符一つに2音入る倍の速さである。左手（又は足）で4分音符の速さを打ち、右手（又は両手）で8分音符を打つ事によって2つのリズムを体感させる。ボディパーカッションの始まりである。手で打つ場所をお腹、肩、頭、と変えていく。さらに16分音符タカタカ、付点8分音符と16分音符のタッカ、2分音符（ターアー）、などのリズムを順次増やしていく。

発達段階でおおむね3歳は、きくこと、表現活動、うたを伴うあそびを喜び、音程はやや安定し、拍子も合わせることができるようになってくる。上記のようなボディパーカッションで、体性感覚と聴覚を働かせ、簡単な組み合わせからリズムに親しむことができる。このような活動は幼児だけでなく、リズムの組合せによって小学生以上、初歩学生にも分かりやすいリズム感の習得法であるといえる。リズム感はしっかりと拍子感に裏打ちされて身につけられる。

酒田1976は「リズム感、旋律感、和音感、各各の感覚を育てると共に一丸として総合的に音楽を感じ取る能力をそだてねばなりません。」脚注10)と述べている。子どもは、いろいろなあそびや作業をとおして実践力を身につけていく。ここまで見てきたソルフェージュのレッスン内容を次項のリトミックを活用することで、より子どもに理解されやすく楽しく受け入れられる。

3. リトミック

「幼児は行動を通して体で覚えます。これが幼児の学習の特長です。」脚注11)

リトミックを考案したスイスの作曲家、音楽教育家エミール・ジャック・ダルクローズ(1865－1950)は、「ソルフェージュと和声を担当する教師であった。和声の授業で身体の動きを使った教授法のアイデアを実践したことを発端として、ダルクローズメソッド＝リトミックと呼ばれる一つの音楽教育法を創案した」脚注12)ことは、非常に興味深い。「ダルクローズは和声の授業で目の前の生徒達の能力不足に気づき、まず和声を学ぶために「足りないこと」を補おうとする。しかし、その時点で再び「足りないこと」に気づき、ソルフェージュで補う、というように段階を逆行する形で、メソッド体系を作り上げていった。そして音楽教

育の基盤になるものとしてリトミック(リズム運動)を置いたのである。」脚注13)リトミックはソルフェージュを補いつつ生まれた指導法なのである。また石丸は「心やからだのやわらかい時期にこそ、耳で聴く力を育て、音楽を感じる心、考える力、記憶する力、構成する力、創造する力などを育てることが大切です。」と述べている。脚注14)「心やからだのやわらかい時期」－幼児期での導入が重要である。

リトミックには、即時反応、模倣、動作、音楽反応(比較体験)－強弱・速い遅い、アクセント、リズム運動－2分音符と4分音符、4分音符と8分音符などや、拍子－2, 3, 4拍子、などの指導が含まれる。別宮が「拍子に合わせて踊る習慣を持たない我々日本民族の音楽的伝統に由来する」脚注15)と述べているとおり、日本人の弱点ともなりかねないこの欠如を補うべき指導であり、音楽を無理なく全身で表現していく指導である。

中でも即時反応のリトミックは2歳児のレッスンにも取り入れやすいものである。発達段階では1歳3ヶ月ごろから、音楽に合わせて身体を揺すったり、うたの一部を真似するようになる。即時反応とは、「幼児の精神を集中させ、合図によってすばやく反応(行動)する能力を高めるための訓練のことで、」「模倣あそびが容易に、たのしく表現され、想像、創作の能力がつかわれていく。」脚注16)

例えば、強い音:大きく動く、弱い音:小さく動く、高い音:背伸びをする、低い音:背を低くする、速度が速い:歩幅を小さく速く動く、速度が遅い:歩幅を大きくゆっくり動く。このように音の特徴、表情を分かりやすい身体の動きにつなげ、子どもたちの意識を「聴く」ことに集中させ、子どもたちも即時、反応することを自然に受け入れていく指導法である。

リトミックのレッスンでは、広い空間が与えられる。ここでは腕や足をのばしてもよい、寝転がってもよい。そして心が解放される。周りには同じ年ごろの子どもたちがいる。ピアノがある、しかし目の前ではないので圧迫感はなく、子どもたちは何かが始まるという期待に満ちている。道具は使用しない、意識を邪魔するものがないので、意識は「聴く」ことに注がれる。イメージを与えるためのいくつかの言葉掛けがあり、音が鳴ると、

言葉のイメージと音のもつ印象が結びつき、解放された心で動くことは楽しさを伴い、全身で音を表現する感覚を体感することが出来る。

3歳でつま先立ち、片足で立てる、4歳になると、バランス能力が向上し、片足跳びやスキップが出来るようになり、音の高低、強弱、はやさ、音色、和音の違いが分かるようになってくる。身体能力が飛躍的に上がるこの頃になると、レッスン内容はさらに充実する。

速い－遅いの「比較体験」『チョウチョとカラス』脚注17)の指導では、

『チョウチョ』: 4分音符 = 144 テンポが速い、高音、体を小さく、フワフワの羽の動き、

『カラス』 : 4分音符 = 92 テンポが遅い、低音、体を大きく、バサッという鋭い動き、

この2種の音イメージを、腕の動き、歩く速さなどを通して表現させる。瞬時にどちらの音かを判断し〈聴覚〉、全身を使って〈体性感覚〉空間一杯に表現する。

このような動作の違いを表現するには「エネルギーのコントロールが必要ですが、それを子ども自らが反応できるようにすることによって音楽的な身体をつくることになります。」「音楽を理解するためには演奏する力だけでなく、音を聞き、その音がどんなエネルギーを持ち、どんな感じなのかを想像し、それを表現できる力が必要」脚注18)という視点で指導していかなければいけない。音を聞き〈聴覚〉それを体で表現する感覚は、リトミックのレッスンによって積み重ねられ、その経験は以後の演奏で生かされていく。「演奏者は音を生成するために身体を動かし、聴覚や体性感覚のフィードバックにより動作を調整する。」「音と運動を司る脳の領域は、このような演奏の経験を積むことによって互いへのネットワークを強める。」脚注19) ことへとつながる素地となり得る。そしてさらに、石丸が「人が持っている5つの感覚、視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚に加えて、第6番目の感覚を育てて、動きに必要な準備やタイミングの感覚を育てることで、意識的に音楽に合った動きを習得し、音楽を知覚する力にしていきます。」脚注20)と述べているとおり、視覚、聴覚、触覚のみならず、様々な音刺激と動きの体性感覚の経験の中で、準備やタイミングの感覚－6番目の感覚を育てていくことにつながっていくのである。

おわりに

「聴く」ことを意識した音楽教育を目指すために、適した導入年齢として、ピアノのレッスン開始は、鍵盤の認識、数の理解、指先の体性感覚、視覚、聴覚への様々な情報をバランス良く吸収できる条件が整ってくる3歳頃からが適していると言える。早期教育が提唱されて久しいが、子どもの発達段階をしっかりと踏まえ、無理なく子どもたちが楽しいと感じられるレッスン内容、指導法、言葉掛けを工夫していかなければならない。ソルフェージュは聴覚に限ることで2歳から、音符、リズム譜、楽譜を用いて3歳からが適していると言える。聴覚のみの導入は容易であるが、視覚情報の導入を始めると視覚優位になりやすい。導入期は視覚情報の提示と聴覚中心の聴音訓練は別々に設定し、また視覚情報を提示しながらの聴音訓練も少しずつ取り入れていくなどバランスを取る工夫が必要である。リトミックは聴覚、体性感覚とのバランスを考え2歳頃からが適していると言える。

初歩学生はこの視覚情報の導入期である幼児期にピアノを習ったことがないか、または数年習ったのち長期間辞めていてブランクがあることが多く、視覚と聴覚の統合への機会を逸している場合や、小学校以降読むこと、書くことの必要に迫られ、視覚情報に迫られ視覚中心になりやすい傾向にあると言える。しかし簡易テストで分かったように、普段視覚優位であると見受けられる学生も、聴音能力を維持しまた向上する可能性を持っており、導入期のような丁寧な指導により視覚、聴覚の統合は可能であると言える。

「育つものの^{おお}偉きな力を信頼し、尊重して」脚注21) レッスン内容を吟味し、今後さらに研究を続けたい。

〈引用文献〉

- 1) 酒田富治「幼児の音感教育」1976 第22項
- 2) 酒田富治「幼児の音感教育」1976 第25項～ジャック・ダルクロワ「子どもとピアノ、母親の為の考察」野村光一氏訳～
- 3) 新 保育士養成講座第6巻 保育の心理学 全国社会福祉協議会 2011 第46項
- 4) 栗山和弘「子どもの数概念の発達について」宮崎女子短期大学紀要第24号 1998 第83項

- 5) 大塚玲「精神遅滞児におけるジャンケンの発達過程」
静岡大学教育学部研究報告 第46号 1996 第131項
- 6) 高野陽太郎「認知心理学」放送大学教材 2013 第100,101項
- 7) 宇佐川浩「発達障害児のコミュニケーション指導」淑徳大学研究紀要 第29号 1995 第147項
- 8) 菊池有恒「楽典 音楽家を志す人のための」音楽之友社 1988 第110項
- 9) 別宮貞雄「子どものための旋律聴音」音楽之友社 1956 はしがき
- 10) 酒田富治「幼児の音感教育」共同音楽出版社 1976 第21項
- 11) 酒田富治「幼児の音感教育」共同音楽出版社 1976 第34項
- 12) 田邊美樹 修士論文「日本のリトミック教育成立の過程に関する一考察」2017 第29項
- 13) 田邊美樹 修士論文「日本のリトミック教育成立の過程に関する一考察」2017 第31項
- 14) 石丸由理「音楽教室におけるリズム活動の実際」音楽教育実践ジャーナル vol.12 no.1 2014 第105項
- 15) 別宮貞雄「子どものための旋律聴音」音楽之友社 1956 はしがき
- 16) リトミック研究会著 芸術教育研究所編「幼児のリトミック」全音楽譜出版社 1998 第8項
- 17) 石井亨 江崎正剛 共著「たのしいリトミック1」オペラ・パブリケーション 1992 第80 - 81項
- 18) 石井亨「歌ってあそぼう 身体表現で楽しく合唱」音楽之友社 1999 第2項
- 19) 上山景子 博士論文「聴覚情報処理に及ぼす音楽訓練と他感覚入力の影響」2014 第7項～
(Lahav, Saltzman, & Schlaug, 2007) ～
- 20) 石丸由理「音楽教室におけるリズム活動の実際」音楽教育実践ジャーナル vol.12 no.1 2014 第104項
- 21) 倉橋惣三「育ての心」上 フレーベル館 2008 第3項
- 28) リトミック研究会著 芸術教育研究所編「幼児のリトミック」全音楽譜出版社 1998

－ 2017. 10. 25 受稿、2017. 10. 31 受理 －

〈参考文献〉

- 22) Erikson, E.H. & Erikson, J.M., 村瀬孝雄・近藤邦夫「ライフサイクル、その完結」みすず書房 2001
- 23) 奥 千恵子「保育者養成と演奏技法（Ⅲ）」四天王寺大学紀要 第58号 2014 第243 - 259項
- 24) 斉藤公子「さくらさくらんぼのリズムとうた」群洋社 1984
- 25) 新 保育士養成講座第6巻 保育の心理学 全国社会福祉協議会 2011
- 26) 中村雄二郎「共通感覚論」岩波現代文庫 1979
- 27) ユーキャン保育士試験研究会「U - CAN の保育士まとめてすっきり！よくでるテーマ88」2013

